



吉沢寛之さん

教育心理学や社会心理学を切り口に、子どもたちが物事をどう受け止め、どう行動するのかを研究しています。元々は犯罪心理学を専門としていました。なぜ人は問題行動を起こすのか。なぜ同じ出来事でも受け止め方が人によって違つか。そんな疑問から研究を続けてきました。

例えば、給食の時間に隣の子から牛乳をかけられたとします。そのとき、「わざとやった」と考える子もいれば、「たまたまつまづいただけだろう」と考える子もいます。こうした出来事の捉え方の違いに注目し

問題行動 環境の影響に注目



ドッジボールの場面を体験できるVR映像＝吉沢教授提供

てきました。

心理学では、こうした物事の受け止め方を「認知」と呼びます。問題行動を起こしやすい子どもの中には、相手の行動を必要以上に悪意的に解釈してしまう傾向が見られることがあります。認知の偏りやセルフコントロールの力、共感性などが非行や問題行動とどのように関わることかを研究してきました。

少年院や鑑別所にいる少年たちを対象にした調査で興味を持ったのが、本人も気付いていない無意識の部分です。アンケートでは本音を隠すことができず、無意識の反応は隠せません。コンピュータで「幸せ」

「病氣」や「万引」「暴力」などの言葉を表示し、その反応時間から無意識に問題行動を起こす傾向を調べました。再犯する少年は他の少年よりも、この傾向が高いことが分かりました。近年は、研究を学校現場にも広げています。不登校やいじめ、暴力行為などは問題が大きくなってから対応するのではなく、早い段階で支援につなげることが重要です。そのために子どもたちの認知やセルフコントロール、人間関係などを把握する仕組みを開発し、学校や自治体と連携しながら活用しています。県内外の自治体で取り組みが進んでいます。

最近VR(仮想現実)を使った研究にも力を入れています。学校で起こりそうな場面を映像で体験してもらい、その状況をどう受け止めるかを調べるものです。小学校低学年の子どもや日本語のアンケートに答えることが難しい子どもでも取り組みやすく、言葉だけでは見えない認知の特徴を捉えることができます。

研究を続ける中で印象的だったのは、コロナ禍で学校が長期間休校になった際の調査です。学校に通えなくなること社会性の低下が心配された一方、認

知の偏りは改善する傾向も見られました。子ども同士の関わりが減ったことで、周囲から受ける負の影響も少なくなったためだと考えられます。コロナ禍以前に人間関係に恵まれていた子どもは共感性が低下する傾向も見られ、人との関わりの中で共感性が育まれることも改めて確認できました。

子どもの問題行動はその子だけの問題ではありません。家庭や友人関係、地域社会など、さまざまな環境が影響しています。子どもを変えようとする前に、その子がなぜそう考え、その行動するのかに目を向け、置かれている環境を理解する。その積み重ねが子どもたちを支えることにつながるのだと思います。(構成・平子宗太郎)

よしざわ・ひろゆき 大学院教育学研究科教職実践開発専攻教授。専門は社会心理学・犯罪心理学。名古屋大学大学院修了。博士(心理学)。1971年生まれ。



データで読み解く子どもの心理